



古今和歌集下



古今倭評集卷第一

意昇一

しるし

あつたての月夜にわたる雲の影をよみかへ

よみかへ

もよほるる白雲の影をよみかへ

よみかへ

しるしにわたる雲の影をよみかへ

よみかへ

白浪の影をよみかへ

よみかへ

音羽の影をよみかへ

よみかへ

之海の影をよみかへ

よみかへ





Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

秋の田のうらやまの草花の香りに  
輝の田のうらやまの草花の香りに  
人ちの心もあやうき心もあやうき  
わく雪のうらやまの草花の香りに  
秋の田のうらやまの草花の香りに  
古今和歌集巻第十二

巻第十二

十のうらやま

思はぬ心もあやうき心もあやうき  
わく雪のうらやまの草花の香りに  
秋の田のうらやまの草花の香りに  
古今和歌集巻第十二

十一

思はぬ心もあやうき心もあやうき  
わく雪のうらやまの草花の香りに  
秋の田のうらやまの草花の香りに  
古今和歌集巻第十二



Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style. It appears to be a personal communication, possibly a letter or a note. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style. It appears to be a personal communication, possibly a letter or a note. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.



Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of dense cursive writing.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of dense cursive writing.





何事か... 読

... 読

... 大江

... 期

... 読

...

... 読

...

...

...

...

一

御書

御書  
御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

風をきく浪の岸の松の影をたづねて  
いかにゆきかきつる雪のふりかへり  
池のほとりにはかきつる雪のふりかへり  
あまのこゝろにまじりてはかきつる雪のふりかへり  
村のほとりにはかきつる雪のふりかへり  
君よこゝろにまじりてはかきつる雪のふりかへり  
伊勢

古今和歌集卷第五

冬十

陸奥

陸奥のちかきれりの花のうらみはかきつる雪のふりかへり

あまのこゝろにまじりてはかきつる雪のふりかへり  
いかにゆきかきつる雪のふりかへり  
池のほとりにはかきつる雪のふりかへり  
あまのこゝろにまじりてはかきつる雪のふりかへり  
村のほとりにはかきつる雪のふりかへり  
君よこゝろにまじりてはかきつる雪のふりかへり  
伊勢  
藤原  
あまのこゝろにまじりてはかきつる雪のふりかへり  
いかにゆきかきつる雪のふりかへり  
池のほとりにはかきつる雪のふりかへり  
あまのこゝろにまじりてはかきつる雪のふりかへり  
村のほとりにはかきつる雪のふりかへり  
君よこゝろにまじりてはかきつる雪のふりかへり  
伊勢

九何世の  
おのれは

おのれは

寛平の

思ふ

小庭

ふ

おのれは

さ

おのれは

おのれは

おのれは

三

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは





長門の山を望むに都は人の居る所なり  
たゞの山ありては人の居る所ありては  
いかにいかにいかにいかにいかに  
うきよき世を望むに都は人の居る所なり  
紅の川花を望むに都は人の居る所なり  
陸奥の山を望むに都は人の居る所なり  
思ふに山を望むに都は人の居る所なり  
ちり色に山を望むに都は人の居る所なり  
小室の山

山を望むに都は人の居る所なり  
思ふに山を望むに都は人の居る所なり  
ちり色に山を望むに都は人の居る所なり  
小室の山  
伊勢  
山を望むに都は人の居る所なり  
思ふに山を望むに都は人の居る所なり  
ちり色に山を望むに都は人の居る所なり  
小室の山

つわたりげなるをまきけり半りおのれちかくを  
とてよみくはつりきり

思ひくもつらき人なりけり

おのれはかたじけなくもていひしるるも  
とてりあめくせけん後

た乃あつてなれ舞ふにや

正徳の古本ありし君

今こそせけんをいひていふもさう

とてりあめくせけん後

玉がころひはけりあめ

よめ人なりけり

まゝにけりあめいひていふもさう

中絶え作のちたりのたのあめ

周院

うほつたつとていひていふもさう

伊勢

あつてあめいひていふもさう

定龍

おのれはかたじけなくもていひしるるも

とてりあめくせけん後

人なりけり

よめ人なりけり

おのれはかたじけなくもていひしるるも

とてりあめくせけん後

おのれはかたじけなくもていひしるるも

とてりあめくせけん後

おのれはかたじけなくもていひしるるも

ついで

秋人

あはれなるわが心はなほ秋の風ぞ吹く

古今和歌集巻第十五

戀 五

女侍のまゝの宮のふれにまはせりか  
くまのこころのまはせりか  
かよふれはくまのこころのまはせりか  
のまはせりか  
あはれなるわが心はなほ秋の風ぞ吹く

月やわが心も昔の春あけの朝もひびく

花とて秋も昔の春あけの朝もひびく

藤原公家

九河田

秋人

秋人

秋人

秋人

伊勢

まをりせり也早よ人の秋はあはれなる

よる人日しるは

秋あえとく白露の霜さきつるも花のしほく成なり  
とよれゆみの塩塵をまじりてははらわさる君の御  
山城の流のつらさしほに人たのむおとく  
あひねとて海を渡りてははらわさる君の御  
暁の時のさうさ君のあはれなる  
おつらういふたもはらわさる君の御  
けの袖もゆふのゆふもあはれなる君の御  
山の井もあはれなる君の御  
とよれさうさ君の御  
こころもあはれなる君の御  
あはれなる君の御

まじんは法師

唐もあはれなるはらわさる君の御

こころがら

ふらのの詠もあはれなる君の御

備正通胎

けの宿道もあはれなる君の御

よる人日しるは

こころもあはれなる君の御  
いよふとてあはれなる君の御  
けの宿道もあはれなる君の御  
月夜もあはれなる君の御  
ふらふとてあはれなる君の御  
こころもあはれなる君の御  
あはれなる君の御

うねりぬきかき

仁のいの松はとえぬねまにわーんのみまなうねり  
かすひくのわたわひしつそはるまのよかこかてん  
まらちやまふれかみふねもろもろかろふんえ  
けつりーま

伊勢

今うらふおふんぬるもあつ人もわろーとあま  
けつりーま

毛林院のみこ

今うらふおふんぬるもあつ人もわろーとあま  
けつりーま

さくこせら

今うらふおふんぬるもあつ人もわろーとあま  
けつりーま

小野ささ

今うらふおふんぬるもあつ人もわろーとあま  
けつりーま

今うらふおふんぬるもあつ人もわろーとあま  
けつりーま

なりのいれれた

今うらふおふんぬるもあつ人もわろーとあま  
けつりーま

うせりつれり

今うらふおふんぬるもあつ人もわろーとあま  
けつりーま

やものうま

今うらふおふんぬるもあつ人もわろーとあま  
けつりーま

徳宗千和た

今うらふおふんぬるもあつ人もわろーとあま  
けつりーま

兵衛

今うらふおふんぬるもあつ人もわろーとあま  
けつりーま

今うらふおふんぬるもあつ人もわろーとあま  
けつりーま

今うらふおふんぬるもあつ人もわろーとあま  
けつりーま



ルニシテ

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

典約海志直子

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテ

伊勢

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテ

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテ

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテ

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテルニシテルニシテルニシテ

ルニシテ

昔よりわが国のことごとくは  
 平らなるに  
 海はわが国をめぐりては  
 諸人あはれ  
 昔よりわが国は  
 志願するに  
 人々の心を  
 平らなるに  
 海はわが国を  
 諸人あはれ  
 昔よりわが国は  
 志願するに  
 人々の心を  
 平らなるに  
 海はわが国を  
 諸人あはれ

古今和歌集卷第十

哀傷部

かく浪雨とあふみ今もつら川を海にわたり  
 小野たけしは  
 ちの浪はらとそなたは川を君の世にわたり  
 僧が勝延  
 ちの浪はらとそなたは川を君の世にわたり  
 僧が勝延  
 ちの浪はらとそなたは川を君の世にわたり  
 僧が勝延





保草れかゝる河國是れ相ある 又座れやたひく

早うきまわりのくまを頼りては日暮きしやうやあゝぬ  
保草のゆせの山河は船人の心よ下れひきかきつら  
月ついでと諒周は成はまねさうにせあをさうりかたは  
のよよのかつこからちりてまらぬまゝあゝれん人  
ぬらゝくはあがぬうたはらうたをたぬしひきかき  
はくよゆれ

保正適船

みふ人ら花の衣は映ぬかりにまねたりよかたてまま  
河余れかゝるまらまらみふかかろく人の縁からんぬ  
とさうゆゑはまらまらりゆゑはまらまらまらまら  
かゝるまらまらまらまらまら 近はれ右のけいし君  
井つとまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
のまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

邦とけいしはまらまらまらまらまらまらまらまら

花のりもくあゝまらまらまらまらまらまらまら

色ものもまらまらまらまらまらまらまらまら

君もまらまらまらまらまらまらまらまらまら

藤原はまらまらまらまらまらまらまらまらまら

下はまらまらまらまらまらまらまらまらまら

君のまらまらまらまらまらまらまらまらまら



古今優遊集卷第十

雜詩二

月夜

清人

我今病也... 月夜... 清人

月夜... 清人... 月夜... 清人

色... 月夜... 清人

月夜... 清人... 月夜... 清人













く

Handwritten text in a cursive script, likely a list or a series of entries. The text is written vertically on the right page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a list or a series of entries. The text is written vertically on the left page of the manuscript.



これぞ我が心なりとて  
よもふもなほとて  
ひえのふりかへりて  
つじりよもなほとて  
いふもなほとて  
は草一のりて  
かりてなほとて  
奉とてなほとて  
西のりてなほとて  
我を君かまへりて  
しをなほとて

からんはなほとて  
よもふもなほとて  
今よりなほとて  
なほとて  
あつてなほとて  
かたなほとて  
君もなほとて  
宗近大頼

うーかゝるもくろくははらうらる ちのけらたむ

すひたうれむふきぬき一軒もまきぬふよそをこ

詩一うら

後人うらと

いさふおれををぬきしとらうむうーたけりぬれぬにわ

せん法一

つう店をたうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

よらん中一うら

あし一うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

かゝるうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

像人信くふ宿るんふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

入うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

詩一うら

よらん中一うら

女中一うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

ま返り尻のうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

見うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうら

伊塊

あゝうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

はか一うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

よあうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

あうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

あうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

あうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

寛平のうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

よあうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

しんく一うらうらうら

うらうらうらうら

かゝりつゝなまむしりておのゝろひて思ふらん  
かゝりつゝなまむしりておのゝろひて思ふらん

風よさらばとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

わが心にくらゝし昔大和國なりとて人の心はわが心

なほさらばとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

11

つれづれに時をくらすは涙もろしき事さうな泣きとて

貞観に時可重集のりてしりはくはるる

とまひしきれははくはるる

神皇正統記のりてしりはくはるる

神皇正統記のりてしりはくはるる

神皇正統記のりてしりはくはるる

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん

あはれとて涙の川に身をまかせし君さしひらぬらん















Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of dense cursive script.

Small rectangular stamp or mark located in the gutter between the two pages.

Handwritten text in Arabic script on the left page, consisting of approximately 12 lines of dense cursive script.



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across several lines. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

東野





いふ所は人の心をわが心とていふことなり

山をたふす龍のよみよみ人の心とていふこと

巻第四

いふ所は人の心をわが心とていふこと

そやとていふれぬことありていふこと

いふ所は人の心をわが心とていふこと

いふ所は人の心をわが心とていふこと

いふ所は人の心をわが心とていふこと

いふ所は人の心をわが心とていふこと

いふ所は人の心をわが心とていふこと

古今和歌集序

紀伊

夫和歌者託其根於心地發其花於詞採者也  
人之在世不能無為思慮易遷哀樂相及  
感生於志詠形於言是以逸者其有不然者  
其吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神  
化人倫和文婦莫宜於和歌倭語有古義一  
曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌  
若夫春寫之晴花中秋蟬之吟樹上雖無曲  
折各發秋謹物皆有之自然之理也然而神  
世七代時實人淳情欵無不和歌未作遠干  
素盡鳥子到出宇國始有三十一字之條今  
反古之化也甚後雖天神之孫海童之女莫  
不以和歌通情者爰及人代此風大起長歌

經哥捉頭混平之類雖非一法流漸盤  
於拂雪之樹生自寸苗之煙浮天之彼起於  
一滴之露至如雜波津之什猷  
天皇富儲川之篇古子或事開神異或具入  
幽玄但見上古哥多存古質之語未為耳目  
之恍惚為交誠之瑞古  
天子每辰必系詔侍臣以寓道者猷和歌君  
臣之情由斯可見賢愚之性於是相分所以  
隨民之欲擇士之才也且大津皇子之初作  
詩賦詞人子慕凡繼塵移波漢家之字化  
我日域之俗氏業一政和歌漸甚然於今先  
師標不古史者高振神妙之思拙矣古今之  
間有山也亦人者並和歌也其餘業和哥

者綿之不振及彼時名流儒人貴者深深相  
考其形流泉漏其實皆落其花如常玉之好  
色之家以中為制鳥之使乞食之客以什為  
活斗之程故半為婦人古那連古史更前  
近代存古風者終二三人然長短不同論以  
亦弁也山僧正心得歌新然之詞荒而少苦  
如畫畫好女沈熟人情在急中將之語其情  
有餘之詞不足如善心雖少彩色而有善善  
文琳巧鍊物如其新近俗如賣人之玉解衣  
字治山僧長撰之詞也麗而首乞傳傳如皇  
秋月遇曉雲小野小町之歌古衣通作之流  
也然於而無氣力也痛婦之志花抄古友里  
主之歌古猿丸大文之鳥也頗有逸興而新

甚鄙如田父之息花示也此亦民性所同者  
 不可勝數其大者皆以艷為甚不亦極之極  
 者也俗人爭事原利不用諒和詐也或  
 雖貴兼相將富財金抄而貴未庸去中名先  
 減心世上通而後世效也者唯和秋之人而  
 已何者語近人耳義憤神也昔平城  
 天子招伯也之撰萬葉集自余以來時歷十  
 代教遺百年其後和亦棄不致檢雖風流如  
 聖寧相避情如在仙云而皆以他方圖不以  
 斯道為

唐之道安紹大內記紀友則所書所記紀貫  
 之於甲斐少目凡何內朽垣古湯心府生士  
 生忠岑古各秋家集并古來舊款曰續萬葉  
 集右是室古詔部類所存之古勅為二十卷  
 名曰古今和歌集凡為詞少去古之類名竊  
 秋夜之長況哉進恐時俗之物退恐身獲之  
 拙適遇和歌之中具以不吝乃之再昌嗟乎  
 人凡沉沒和歌不在斯式于時延喜五年歲  
 次乙丑四月十八日長實之等謹序

評和智屋新刊

京車屋町夷川上野  
 林久次郎  
 菅神皇乘物出卷  
 同源兵衛

